

タイトル	Purgatoryについて
著者	川上，武志
引用	北海学園大学人文論集，23・24：53-63
発行日	2003-03-31

Purgatory について

川 上 武 志

1938 年のアベイ劇場祭は 8 月 8 日から 20 日までの約二週間にわたって開催されたが、その期間にアベイ座三十余年の成果を示すべく、新旧取り混ぜた劇が上演された。劇場の評議会は、その前進となる「アイルランド文芸座」の生き残りであり、アベイ座創設の立役者でもある W.B. Yeats に敬意を表するために、三日目の演目として彼の新作詩劇『煉獄』(Purgatory) を懸けることにした。翌朝、劇場監督の一人であり、Yeats から多大な影響を受けていた詩人 F.R. Higgins の講演が、グレシャム・ホテルであった。そのおり、Connolly というアメリカ人神父から、この劇は何を表わしたのかとの質問を受け、Higgins はその返答に窮した。さらに、会長職にあった L. Robinson も、その意図は作者だけが知っていると答える有様であった。二日後に、*Irish Independent* 紙からのインタビューを受けた Yeats は、このことについて「Connolly 神父が、私の筋はまったく明瞭だが、意味がわからないと発言したが、私の筋が私の意味だ (My plot is my meaning.)」と説明した。

『煉獄』は、1938 年の春にサセックス州スタイニングにある E.S. Heald の館で書き始められたとみられる。その時分に Yeats の恋人と噂されていた、この女性ジャーナリスト宛の手紙には「私は悲劇的強烈さの一場面 (a scene of tragic intensity) の一幕ものを構想しています……私の近作はこれまで以上の奇妙さと強烈さがあると思います」と書かれている。『煉獄』の初演には Yeats 自身も顔を見せていたのであるが、内容が子殺しであり、名家の令嬢の性的欲望についてとなると、往時のアイルランドでは問題が起こるのは必至であった。しかし、騒ぎの始まった直後の Heald への手紙では、肝心の上演での観客の手応えはかなりのものだったことに

Yeats は満足して、このような外野席の喧騒(これまでもしばしばあった)は疲れるので‘黙り’を決め込むことにする、と伝えている。また、同じ日に投函された D. Wellesley 宛のものには、公演後の Yeats の発言を取り上げた *Irish Independent* 紙の誤報に触れて、「私がこの劇に示したのは、この世とあの世に関する私自身の信念なのです」とある。この言葉は、(‘筋’ plot という用語の定義をここではあまり詮索しないで) 先の神父が発した疑問への回答となるのであろうか。確かに、詩劇『煉獄』の筋は直線的であり単純であると言えるのであるが、作品にたいする諸家の様々な解釈があるところをみると、その意味はそう簡単でもないようにも思われる。ともあれ、作者である Yeats 自身が‘私の筋が私の意味だと’言明しているのだから、先ずもって、小論では劇筋を中心に作品を検討していくことにする。

それまでの難解な神秘劇のなかにあって、『煉獄』は多くの批評家から、恐らく理解しやすい最良の劇であろうとの評価を受けてきた。しかし、この作品を批判する例外に H. Bloom がいる。彼は、その著書 *Yeats* のなかで、『煉獄』について次の様な評言で締めくくっている。

…… *Purgatory*, unlike *The Herne's Egg*, survives the squalor and grotesqueness of its own argument, but this is largely a rhetorical survival, based upon our deception. Yeats is not separable enough from the old man's rage to render the play's conclusion coherent. That hardly makes the play less powerful, but perhaps we ought to resent a work that has so palpable a design upon us. Eugenic tendentiousness is not a formula for great art, even in Yeats.

先に言及した *Irish Independent* 紙のインタビューでも述べているが、Yeats が『煉獄』のテーマの一つとして、不釣り合いな結婚 (*mesalliance*) によって没落した屋敷と優生学上の問題を絡めて提示しているのは明らかである。もし、Yeats 自身が主人公である老人の意見を代弁しているとなる

と、Bloom がいうように、「優生学的偏向は、たとえ Yeats であっても偉大な芸術の公式とはならない」ことは頷ける。Bloom が、このような結論を下すのは、『煉獄』が、当時書き進められていた評論 *On the Boiler* と合わせて出版される予定にあったので、(実際は、校正刷りの不備と Yeats の死亡が重なって取り止めになるが) 劇とこの評論とを関連づけて解釈するからである。例を挙げれば、評論に収められている ‘To-morrow’s Revolution’ のなかの

Since about 1900 better stocks have not been replacing their numbers, while the stupider and less healthy have been more than replacing theirs. Unless there is a change in the public mind every rank above the lowest must degenerate, and, as inferior men push up into its gaps, degenerate more and more quickly.

という部分や

Sooner or later we must limit the families of the unintelligent classes, and if our Government cannot send them doctor and clinic it must, it gets tired of it, send monk and confession-box.

といった記述に、優生学にたいするはっきりとした Yeats の興味が窺えるが、もしこのような見解を劇の注釈とするならば、『煉獄』はいささか‘奇妙’な作品であるといわざるを得ない。また、Yeats が、時の De Valera 政権に対抗するためとはいえ、ファシストに傾斜したのは紛れもない事実であったし、わずかな期間ではあっても、「青シャツ党」を率いる O’Duffy 将軍の運動に共感したことも否定できない。さらに、O’Duffy の運動を支持しなくなった後も、Yeats は自国アイルランドの紛糾を救うには、少数の優れた人間による専制的政治形態が望ましいと発言していたこともある。自由民主主義が産みだす大衆政治の混乱を嫌う当時の知識人の問題として、共

産主義か全体主義かの選択があったことが、些かでもその弁明となるのであろうか。ともあれ、政治と文学との関係という観点から、モダニストの保守的・エリート的趣向を捨象して、『煉獄』をこういった問題と切り離して読む方法がある。端的に言う、この劇の主人公の言辞を Yeats のものとは見做さないという読みである。また、*On the Boiler* は、ヴィクトリア朝時代の行き過ぎた物質主義に盛んに警告を与えた J. Ruskin の著作に習って書かれているが、その表題が、Yeats の少年時代に Sligo の港に係留されていた老朽船のボイラーの上で「聖書を読め。然るに汝の隣人を糾弾せよ」などと絶叫していた‘奇妙’な老人のエピソードから取られていることから、この評論の極端ともいえる意見に、彼の晩年の作品に登場する瘋癲老人の姿を重ね合わせる見方である。しかしながら、‘平凡な特質の主張’が幅を利かす現代に、争い(暴力)を求めて荒ぶ姿(仮面 Mask)には、あながち癡狂といえぬところもある。

『煉獄』には、八ページの筋書ノート、二種類の手書きの原稿、Yeats 自身の筆が加わった四種類のタイプ打ち原稿、校正入りのもの一部が残っている。このなかで、タイプ打ちの第四原稿が最終形に最も近いもののようであるが、特に、筋書ノートが劇筋への手掛かりを与えてくれる。劇の展開を上演時(1938年)に設定し、Parnell 時代からのアイルランド現代史の経過を象徴的に読み込むのは、D.T. Torchiana である。彼は主人公の老人の年齢を 63 歳とするが、この根拠は主に Yeats の残した筋書ノートに求められる。また、舞台背景としては、大きな窓と戸口を残す屋敷跡と、その片側に庭壁か生垣を配すように考えられていた。これらは、結局、劇が‘絵画的(picturesque)’と思われるといけないうので除かれ、廃屋に立枯れの一本の木だけが置かれるよう指示されることになった。『煉獄』は、能の意匠がそれほど顕著でない作品ではあるが、この枯れ木の配置は多分に能劇を意識したものかもしれない。能舞台の奥壁の鏡板のたわわな老松とは対照的ではあっても、苔むすような老木はよく〈霊〉の依代ともいわれるからである。

さて、このような背景のなか、各地を渡り歩く行商人の老人が 16 歳になる息子を引き連れて登場する。息子への老人の開口の台詞（‘Study that house.’）には、有無を言わせぬ調子がある。引き続く背景への言及（‘study that tree, What is it like?’）は、立枯れの木についての象徴を（息子にというより）観客に惹起するが、老人はその答を故意に留保する。この強い語り掛けの調子は、どういうわけか諸家も見逃しているのであるが、老人がこの場所を一年前に一人で訪れている（‘I saw it a year ago stripped bare as now,’）ということで説明される。そのとき、彼はこの因縁の場所で、「夢見回想」（dreaming back）に苦しむ母親の姿をまさに目撃したのである。自分の職業がそう悪くはない（‘So I chose a better trade.’）と洩らすのは、その因果のほどを確認するためであり、今回、息子を伴って再び訪れたのはそれ相応の意図があったからである。

they know at last
The consequence of those transgressions
Whether upon others or upon themselves;
Upon others, others may bring help,
For when the consequence is at the end
The dream must end; if upon themselves,
There is no help but in themselves
And in the mercy of God.

ここは、Yeats の‘この世とあの世に関する信念’についての部分であるが、同じテーマを扱う『骨の夢』（*The Dreaming of the Bones*）や『窓ガラスの文字』（*The Words Upon the Window-pane*）よりも、はるかに劇筋に組み込まれていることがわかる。T.S. Eliot がいうように、書物の読者の場合と違って、劇作家にとって詩劇とその上演に伴う困難さに、わずかな時間的制約—短い上演時間—のなかで、初めてその劇を見る（不特定）多数の人々を得心させねばならないことがある。また、この箇所は Yeats が

自著 *Vision* の 'The Soul in Judgment' の内容を老人に説明させる部分ともなっている (B. Rajan)。ここで問題になるのは、母親の犯した因果の胤が老人自身であり、さらに下ってその息子であることから、母親の罪業は 'おのれに係わること' のではなくて、ひょっとして '他人に係わること' ではないかと、老人が考えたことである。いや、母親救済の余地を残したいがために、むしろ、そう '考えたかった' というほうが正確かも知れない。*Vision* によると、母親が「夢見回想」状態の苦しみから解放され、もう一段上位の「回帰」(Return)に進むには、その〈霊〉(Spirit)が事件の一つ一つを原因にまでさかのぼり、最終的にすべてを関連づけて理解し、さらに知識にかえて自らの一部としなければならない。そのときの出来事が現れるたびに、〈霊〉はその事の原因ばかりでなく、結果まで探索せねばならないが、これには、肉のある生者の援けが必要とされると説明される。したがって、劇は老人が息子に、母親と飲んだくれの馬丁男とのそもそもの馴初めから語り始めるという展開となるが、母親の犯した過ちの代償は、

Where the soul has great intensity and where those consequences
affected great numbers, the *Dreaming Back* and the *Return* may
last with diminishing pain and joy for centuries.

であり、「出来事の結果が、多くの事柄にあまりにも大きな影響を与えた」事例にあたる。それゆえ、(意図的に)老人はこのことを回避したという解釈が考えられる。結果、老人は、多くの偉人を輩出させた名家の崩壊を、この上もない罪であるとして、その咎を父親の所行に転化していくことになる。

But he killed the house; to kill a house
Where great men grew up, married, died,
I here declare a capital offense.

老人が、やはり 16 歳の時に犯した父親殺しというおぞましい事件の顛末を語り終えると、馬の蹄の音が合図となって、「夢見回帰」を続ける母親の〈霊〉が廃墟の窓に現れる。ふつう、〈霊〉は言語も意思も持ち合わせていないとされる。だから、劇的事件における名称やせりふを知ろうとするならば、肉体を備えた〈精神〉(Mind)に頼る必要がある。言い換えると、肉のある生者の助けが必要とされるので、母親の立居振舞いは、老人の口を借りてモノローグ風に描写される。その説明どうりに動く母親の姿は、当然、観客も目撃する演出となるが、息子である少年の目だけには依然として写らない(この理由については後ほど触れる)。母親に主人公である老人の種が宿される重要な場面の台詞

But there is a problem: she must live
Through everything in exact detail,
Driven to it by remorse, and yet
Can she renew the sexual act
And find no pleasure in it, and if not,
If pleasure and remorse must both be there,
Which is the greater?

が、唐突な感じがするのは否めない。すぐ後の、情事にふける両親を尻目に、カルタゴの哲学者を引き合いに出す件(‘Go fetch Tertullian; he and I/Will ravel all that problem out……’)も含めて、その理由を老人の狂気にあるとして、今繰り広げられていることを目の前にしながらも、母親の過ちが引き起こした因果のもつれが、‘誰に係わる’かを主人公が理解できないという意見(P. Ure)がある。劇の頂点に用意される子殺しの理由がうまく説明されないからであろう。先述したように、老人が生半可に古代の来世哲学の知識を振り回すことによって(母親の血統による)、この問題を周到に避けたというのが筆者の解釈であるが、さもないと、この後の展開からみて劇筋が一貫したものとはならないからである。

Yeatsがよく言うところの‘鏢錢’をめぐる老人と息子の争いが始まるが、息子の親殺しの脅迫(‘What if I killed you?’)は老人の耳には殆ど届かない。というのは、性交—まさに老人を孕ませた—で疲れた父親の幻〈霊〉が窓際に現れたからである。このとき初めて、物質世界以外に関心を示さなかった鈍感な息子が、祖父に当たる死者の〈霊〉を目撃する。その理由を両者の俗物的性行が一致しているからとするより(Ure), たとえ不十分([*He covers his eye.*])ではあっても、息子が死後の世界に感応し、否応無くこの状況に巻き込まれたとみたい。だが、この父親の〈霊〉は、実は、母親の心に焼きついた姿に過ぎないことに、老人は思い当たる。母親の一人きりの「夢見回想」における悔恨は続く。ここで、父親を殺したときと同じナイフでの子殺し(‘My father and my son on the same jack-knife!’)という劇の頂点を迎える。ところで、Yeatsの筋書ノートではこの場面は次の様になっている。

Come, come, come, I say, that I may kill, and my mother find rest now that the evil is finished. (BOY rises and comes slowly to OLD [MAN], who stabs him. The vision fades. As it fades the hoof beats are heard again.)

まるで父親が息子を説き伏せ、息子のほうもそれに従うかのような感がある。以前に、老人がこの地を再訪したのには或る意図が秘められていると述べたのは、母親を苦しみから救うために、子殺しは初めから考慮されていたということである。瀕死の息子に口遊ぶナーサリー・ライムも、我が子にというより、老人にとっては、母親の長年の苦悶を慰撫するものでなければならない(‘if I sing it it must be to my mother’)。舞台暗転となり、枯れ木が白い光に照らされて浮かび上がる。開演時に保留された枯木のもつ象徴一面々と引き継がれてきた貴族的な伝統と、その最後の後継者となった母親の魂—がここで明らかとなる。老人は、正に息を引き取らんとする息子に諭すかのように、

Study that tree.

It stands like a purified soul,
All cold, sweet, glistening light.

と語りかける。老人（すでに不能の身である）は、母親の魂が過ちの因果から解かれて、いまやその苦しみが浄化されたと錯覚し、息子殺しの事由を告白するが、

I killed that lad because had he grown up
He would have struck a woman's fancy,
Begot, and passed pollution on.

白々と輝く木の光景は、「過去の出来事が、それに伴う感情の激しさにしたがって、にぶい、または明るい光のなかに浮かび上がる」とされる「夢見回想」の瞬間にしか過ぎない。ここで、再び馬の蹄の音が響き、母親の〈霊〉は‘おのれに係わる’罪のために、依然として「煉獄」にいることが分かり、二度の殺人がまったくの徒労であった（‘Twice a murderer and all for nothing’）ことを、老人は悟る。

Yeats は、死亡から生誕にいたる期間を六段階に区分しているが、「夢見回想」はその最も早い段階にあたり、「機能」(Faculties) の車輪の上では、大まかにいって、第 22, 23 相に相当すると注解している。彼の歴史哲学によると運命の支配が強まる《始原性》(Primary) が始まるのは、丁度、月の諸相の第 22 相からであり、終末的な現代に繋がる。このことから、詩劇『煉獄』は、客観的な現実の色調を映す現代を描く作品であると解釈することもできる。というのも、この作品における母親の深い悔恨は、『骨の夢』の恋人達と同様に、現代の状況にたいして向けられているからである。「歴史の予定説」を主張する Yeats の思想からみて、煉獄にいる母親の過ちは、息子である老人の子殺しという贖罪的な行為によっても決して拭い去れる

ものではない。だからこそ、母親は長い悔恨に苦しまなければならないのであり、その因果を背負う現世の人間達も同様に苦しまなければならないのである。老人の最後の科白

O God,
Release my mother's soul from it dream!
Mankind can do no more. Appease
The misery of the living and the remorse of the dead.

は、正にこのことを示した悲痛な叫びとなる。

参考文献

- Allison, Jonathan. *Yeats's Political Identities: Selected Essays*. Michigan U.P., 1996
- Bloom, Harold. *Yeats*. Oxford U.P., New York, 1970
- Bradford, Curtis. *Yeats AT WORK..* Southern Illinois U.P., Carbondale, 1965
- Cullingford, Elizabeth. *Yeats, Ireland and Fascism*. Macmillan, London, 1981
- Eliot, T.S., *On Poetry and Poets*. Faber & Faber, London, 1969
- Jeffares, A.N., & Knowland, A.S., *A Commentary on the Collected Plays of W.B. Yeats*. Macmillan, London, 1975
- Keane, P.J., *Yeats's Intersections with Tradition*. Missouri U.P., Columbia, 1987
- Moore J.R., *Mask of Love and Death: Yeats as Dramatist*. Cornell U.P., 1971
- Nathan L.E., *The Tragic Drama of William Butler Yeats: Figure in a Dance*. Columbia U.P., London & New York, 1965
- Rajan, Bachandra. *W.B. Yeats*. Hutchinson Univ. Library. London, 1969
- Taneja, G.R., Ed., *W.B. Yeats: A Anthology of Recent Criticism*. Pencraft International, Delhi, 1995

- Taylor, Richard. *A Reader's Guide to the Plays of W.B. Yeats*. Macmillan, London, 1984
- Torchiana, D.T., *W.B. Yeats & Georgian Ireland*. The Catholic Univ. of America Press, Washington, D.C., 1992
- Ure, Peter. *Yeats the Playwright*. Routledge & Kegan Paul, London, 1969
- Wade, Allan. Ed., *The Letters of W.B. Yeats*. Octagon Books, N.Y., 1981
- Welch, Robert. *The Abbey Theatre 1899-1999. Form & Pressure*. Oxford U.P., Oxford, 1999
- Wilson, F.A.C., *W.B. Yeats and Tradition*. Methuen, London, 1968
- Yeats, W.B., *A Vision*. Macmillan, London, 1962
- Explorations*. Macmillan, London, 1962
- The Collected Plays of W.B. Yeats*. Macmillan, N.Y., 1963